

# 土門剛

土門剛 どもん たけし

【プロフィール】

1947年大阪市生まれ。早稲田大学大学院法学研究科中退。主な著書に、『農協が倒産する日』（東洋経済新報社）、『穀物メジャー』（共著／家の光協会）、『東京をどうする、日本をどうする』（通産省八幡和男氏共著／講談社）、『新食糧法で日本のお米はこう変わる』（東洋経済新報社）など。会員制メールマガジン「アグロマネーニュース」も発行している。

房総、渥美、大隅。これら三つの半島が、露地野菜、それもダイコンやキャベツなど重量野菜で国内屈指の産地である。なぜ半島で産地が育ったか。NHK「ブラタモリ」のごとく、まずは地質、次いで気象、そして地理的条件にも答えがある。それを「テロワール」と呼んでいる。農業にも通用する概念で、テロワールに沿った農業を昔から適地適作と呼んでいた。その切り口で半島農業の強さを証明してみよう。

## 房総半島

### 銚子に遊休畑ほとんどなし

まずは首都圏の房総半島。半島

の付け根は、西が江戸川の河口あたり、東は太平洋に突き出た犬吠埼。千葉県のほぼ全域だ。半島の面積としては全国3位の5034km<sup>2</sup>になる。トップは紀伊半島、2位は北海道の渡島半島だ。広域に及ぶため、作物も多種多様。房総半島で見所は、利根川の河口にある銚子市近辺のダイコンとキャベツだろう。全農ちばの産地紹介には、次のような記述がある。「銚子は千葉県最東端にあり、その南東部分は太平洋に面し、北は

利根川沿線の低地、西は表層を関東ローム層で覆われた北総台地に連なっており、海洋性の温暖な気候に恵まれ、明治の初期から大根が生産されていました。昭和30年代中ごろから、農協が中心となり、商業ベースとしての市場出荷体制を築き上げました」

ポイントは、海洋性の温暖な気候に恵まれた銚子市。半島は、海に突き出た地形だ。海流の影響を受けやすい。銚子沖には、親潮（千島海流）が北から、黒潮（日本海流）が南から流れ込む。季節によって海水温変化があるので、内陸に比べて夏は涼しく、冬は暖かいという気候特性がある。銚子気象台の観測では、年間の平均気温は15・7℃、厳寒期でも最低気温は2・4℃を超える。市内でも、沿岸部と内陸部では冬季の温度差が大きい。

沿岸部の東部地区では、冬季温暖な気候を活用した春キャベツの栽培が盛ん。一方、内陸部の西部地区ではダイコンが中心となる。

## 産地間競争をリードする半島農業

### その強さをもたらしたテロワール

一大産地として確立したのは、1966年に秋冬ダイコンが農水省の産地指定を受け、集出荷の支援態勢がとられて以降のことだ。今から数年前、産地をドライブしたことがある。印象に残っているのは、遊んでいる畑が極端に少なかったことだ。それだけ農地が回転している証でもある。銚子市農業委員会に確認しても、畑はよほどの悪条件でない限り、遊休地や耕作放棄地になっ

ていない。畑作が盛んなことを反映してか、農地の賃貸料金も、田と畑で大きく違う。ここでは「畑高」の「田安」だ。2022年3月に銚子市農業委員会が公表した「賃貸料情報」によると、21年1月から12月までの賃貸料水準の平均額は、田が7900円/10a、畑は2万2900円だった。売買価格も、畑は田の2倍近くはするそう

だ。房総半島の農業の特色を裏付ける農地価格だ。忘れてならないのは、銚子市から太平洋に流れ込む利根川の存在。半島に農業用水を供給する主たる水源になっているからだ。利

根川は、徳川家康が江戸に幕府を開いた頃には江戸湾（東京湾）に流れ込んでいた。家康は、その流路を銚子に変えた。歴史の教科書は、「利根川の東遷」と書いている。その東遷なかりせば、房総半島の農業がこれほど盛んになることはなかったと思う。

## 渥美半島

### 施設園芸のパイオニア

半島農業の東のエースが房総半島なら、西のエースは愛知県南東部の渥美半島だ。東西50km、南北5〜8kmと細長い半島。根っ子部分は豊橋市。それから西の伊良湖岬までが田原市だ。面積は671km<sup>2</sup>。房総半島の13%。半島の南側は太平洋に面している。

年平均気温は16.5℃と温暖。降水量は1667mm平均。気象で大きなポイントは、日照時間が長いことだ。年間2278時間もあつる。これは全国トップクラス。しかも冬期には滋賀県に山頂がある伊吹山から吹き付けてくる季節風がある。伊吹風のことだ。年間の平均風速は3.6m/sもある。

渥美半島は、ガラス室やビニールハウスを利用した施設園芸が盛んなことでも有名だ。日照時間の

長さを取り込んだ野菜や花などの栽培形態だ。豊橋市が、施設園芸のルーツであるという説もある。それを裏付けるのは、豊橋市に日本施設園芸をリードする企業が3社もあることだ。

渥美半島で最初に施設園芸を取り入れたのは、田原市文化財課の「歴史探訪」では、昭和7年というから、90余年の歴史がある。最初はメロンやキュウリの果菜類を栽培していた。戦後まもなく、温室の電照を始める農家が出てきた。菊の花芽ができる前に照明をあてることで人工的に日照時間を長くすることができると。これにより開花調整を可能にし、市場に花のないシーズンでも出荷できるようにになった。

その電照菊にアゲインストの風が吹き始めたのは、もう10数年前になる。田原市の知人Aさんも、電照菊の栽培に取り組んでいたが、葬儀が簡素化していく流れを讀み取り、施設を利用したトマト栽培に切り替えて成功。早くから施設園芸に取り組んでいた経験が作物転換を容易にさせたようだ。

マーケットの変化に敏感な生産者が多いことも渥美半島の特徴かもしれない。中京圏という大消費

地から近いということが、そうさせるのだろうか。

陽春の頃、豊橋から伊良湖岬の方へドライブすると、インスタ映えする景観に目を奪われる。広大なキャベツ畑に菜の花という構図だ。いまはキャベツが主流だが、昔はダイコンとのダブルヘッダー。ダイコンの作付けが減ってキャベツがメインになったようだ。

この地の特産に「渥美沢庵」がある。ダイコンの生産が始まった頃に早くも特産化。昭和の初期というから100年ぐらい歴史がある。売り先は中京圏。重量野菜なので産地加工となったようだ。加工に適した気象条件があった。伊吹風との関係だ。たくあん加工には、収穫したダイコンを天日干しにする工程があり、伊吹風の強い風を利用したという次第。

昭和30年代後半の最盛期には、「渥美半島」一帯で4斗樽（70kg樽）にして計算すると年間60万樽出荷。現在の日本人の消費に合わせると、約7500万人分のたくあんを供給していた（たくあん百科事典から要約）というから一大ヒット商品になった。

そのたくあんは逆風が吹く。ライバルが登場してきたからだ。浅

漬けやキムチなどだ。さらにお米の消費量が減っていることもたくあんの需要減少をもたらすことになった。

かくして渥美半島でインスタ映えするキャベツ畑が誕生したのだ。人口6万人の田原市は、2014年から5年間、市町村別農業産出額で、キャベツの生産が全国トップだった。19年から宮崎県都城市にトップを譲ったものの、2位の座をしっかりとキープ。いずれ返り咲きはあるだろう。

渥美半島の農業は、農協の健闘があった。ハウスに設置された重油タンクには「あいち経済連」のロゴが目立つ。キャベツやダイコンの重量野菜は、集出荷施設整備の関係で農協主導になるようだ。

キャベツ生産は適地適作だった。葉菜類を得意とする東北種苗のホームページに次のような紹介記事がある。

「太平洋沿岸の温暖な渥美半島では、冬季関ヶ原を抜けた季節風が常に吹き付けるため霜が降りにくく、キャベツ栽培に適した気候となつていきます。そんな気候のおかげで冬のキャベツの出荷量は現在愛知県が日本一です。温暖とはいっても冬の季節風は10℃以下、風

に耐えて行う収穫作業はなかなか忍耐が要ります。農家の方々に感謝です」

渥美半島の農業をめぐる今日の状況をお伝えしておこう。田原市農業委員会が公表した農地の賃貸料情報から畑の部分だけを抜き取り整理したものである（表参照）。

田原市平均と比較すると、普通畑が値下がりしているのに対し、ハウス敷地は大幅に値上がりしている。インフレで諸資材が高騰し、なおかつ先行き不透明でもあるので、ハウスの新設を見送り、ハウス付き物件にニーズが集まったということだ。地域的には、トヨタ自動車の工場がある田原地域だけが逆に大きく値下がりしている。渥美半島でも、この地域は高齢化や後継者不足による農地の遊休地化が問題になっている。農地が賃貸に出されても借り手が少ない。それが賃貸料に反映されている。

その一方で、伊良湖岬に近い渥美地域や、太平洋側の赤羽根地域は、規模拡大による農地のニーズが高いことを示している。

# 土門 辛聞

房総半島の農業用水が利根川なら、渥美半島

■田原市の畑賃貸料 (円/10a)

	2022年		2021年	
	普通畑	ハウス敷地	普通畑	ハウス敷地
田原地域	18,500	33,100	17,400	84,300
赤羽根地域	15,600	92,200	18,900	61,100
渥美地域	20,000	78,700	22,500	56,500
田原市平均	18,500	76,200	19,800	57,200

「普通畑」と「ハウス敷地」とあるのは、ざっくりばらんに説明すると、更地か、居抜きに使える物件かという違いだ。後者は、施設園芸に利用可能なハウスが建っている畑のことを指す。

は、豊川と天竜川から取水する豊川用水だ。干ばつの被害から渥美半島の農業を救い、半島農業の西のエースに押し上げたのだ。

## 大隅半島——国内露地野菜最後の砦

鹿児島島のランドマークは、桜島。それを二つの半島が手で包むような地形の鹿児島だが、その半島名を答えられる方は少ない。西側は薩摩半島で、東側が大隅半島だ。大隅半島は、国内露地野菜にとつて最後の砦だ。ここを突破されたら、次は中国・山東半島ということになる。

そもそも、大隅半島は農業に向きの地だった。大昔の火山噴火

の堆積物「シラス」に覆われていることだ。火山ガラスが主成分のやせた土地に、地下水位が極めて低く、保水力が乏しく、干害の被害を受けやすい。サツマイモが特産なのは、乾燥に強く無肥料でも育ち、根菜なので台風被害も受けにくいからだ。

サツマイモ畑が目立った半島で、キャベツやハクサイなど葉菜類の生産が可能になるのは、高度成長期に国によって大規模な灌漑事業が実施されたからだ。

大隅半島が、房総半島や渥美半島と違う点がある。露地野菜で100ha規模の生産組織がいくつもあり、それを原料にする加工会社が多いことだ。3大都市圏から遠く離れていることから、産地加工というビジネス形態が定着したようだ。

大隅半島が、国内露地野菜にとつて最後の砦という証を示しておきたい。半島でもっとも農業が盛んな東串良町。経営面積が50〜60ha規模の露地野菜を専門にした農業法人が3社もある。加工用だけでなくスーパーやコンビニ向け生食も含めての露地野菜産地だ。町がまとめた「農作業の標準賃金」と題した資料には、農地の「標準

賃貸料情報」のほかに、「請負作業賃金」と「農作業日雇賃金」の情報も記載されていた。

請負作業賃金は、畑なら、耕起のみ、プラウ耕、畦立・マルチ張りなど5作業の10aあたり料金が示されている。機械や施設に無駄な投資せず、作業を委託している。日雇賃金は、一般作業で22年度は、鹿児島県の最低賃金の数字、1時間821円の数字があった。渥美半島・豊橋市の最低賃金より17%下回る。

大隅半島は、4市5町に4農協（JAおおぞら、JAそお鹿児島、JA鹿児島もつき、JA肝付吾平町）。砦に立てこもって輸入野菜に敢然と立ち向かうのは誰かと調べてみたら、残念ながら農協ではなかった。

4農協の野菜全体の販売高（115億円）を、4市5町の農業産出高の野菜（243億円）で割ると、農協は47・3%で半数には満たない。加工用のキャベツやダイコンの国産重量野菜に絞ると、4農協合わせて3割のシェアがあるだろうか。農協という組織は、グローバルな産地間競争に屁の突っ張りにもならない組織ということが分かる。